

# お墓のすげかえ

長谷川時雨

青空文庫



一族の石塔五十幾基をもった、朝散ちようさん太夫たいぶ藤木氏の末裔まつえいチンコツきりおじさんは、三人の兄弟であつたが、揃いもそろつた幕末お旗本ならずもの見本で、仲兄は切腹、上の兄は他から歸つてきたところを、襖ふすまのかけから跳り出た父親が手にかけての**だ**つた。末子ぼっしのチンコツきりおじさんが家督をついだ時分には、もうそんな、放蕩児ほうとうじなぞ気にかけていられない世の忙せわしさだつた。おかもとときどう岡本綺堂氏作の『尾上伊太八』という戯曲の中に、伊太八という幕末の江戸武士が吉原の花魁おいらん尾上おのえと心中をしそこなつて非人におとされてから、非人小屋の床下を掘る場面があるが、あれを見るたびに私は微笑とも苦笑ともなづけがたいほほえみが突上

げてくる。伊太八のは根強い悪だが藤木さんの時代はユーモアがある。この放蕩漢兄弟は金がほしくなると種々な智恵の絞りつこをしたが、だんだんに詰って土を売ることを思いついた。

江戸の下町でよい庭をつくるには、山の手の赤土を土屋から入れさせるのである。今のように富限ふげんしや者が、山の手や郊外に土地をもつても、そこを住居いえにしていかなかったので、蔵と蔵との間へ茶庭をつくり、数寄すきをこらす風流を楽しんでいた。一木何十両いちぼく、いつせき一石数百両なぞという——無論いまより運搬費にかかりはしたであろうが贅ぜいたく沢を競った。その地面に苔こけをつけるには下町の焼土では、深山、または幽谷おもむきの風趣を求めるとは出来ない。植木のためにもよくない、そこで赤土の価がよい。

三人の兄弟がその時ばかりは志が一致する。父親が勤めに出てしまふと、なるだけ坪数のある広間、書院の床下から仕事をはじめる。自分たちでやって見たが、根ねっから遊惰ゆうだな男たちには、堅い土がいくらも掘りかえされないので、大つぴらに父の留守を狙ねらつては払いさげをやる。売る土がなくなると姉が死んだといつて、蔵前の札差ふださしに、来年さらいねんの扶持米を金にして貸せといたぶりに行く。札差し稼業はもとよりそういう放埒ほうらっな、または貧乏な武士さむらいがあつて太るのだ。貴下あなたには泣かされますといいいながら絞る。いくらにでも金にすればよいので、時価なぞにかまつていないよいお得意なのだから、彼らの番頭はうやうやしく町人袴ばかまをはき、手代ともを供につれて香こう奠でんをもつて悔みにくる。おなじ穴

の猪むじな友達が出て殊勝らしく応待して、包んで来た香こうでん奠の包みを  
もつてはいると、そんな事は知らない姉じゃ人が、日頃厄介をか  
ける札差の番頭が来たというので挨拶に出て、すっかり巧たくみの尻しり  
が割れ、ならずものたちは裏門から飛出してしまふ——

そんな話を藤木さんは自分でも面白そうにはなす。もつと尤もそれは  
柳橋にすむようになって、昼も酒さか盃かずきをもつていられるようにな  
った、ずっと晩年のことではあるが——

柳橋の角に、檜ひのきづくりの磨きたてた造作の芸妓屋を、姉娘の旦だ  
那んなに建ててもらい、またその隣家となりを買いつぶして、小意気な座敷を  
妹娘の旦那に建増してもらつて、急に××家のおとつさんおとつ  
さんとたてられ、ばかに華はなばな々しく彼のキンカン頭が光りだした

時、持前の毒舌はいい気になって発揚した。無学で——それは彼もおなじなのだが——平民というと、見下みさげられるものとのみこんでいた無智な仲間は、娘を売るような士族でも偉そうにあつかった。なので彼は得意だった。例によつて彼自身では何一つ楽しみも与えもしないで、苦勞ばかりさせた妻にむかつては「ぼていふりの嬢かかあが相当だ」と罵のつた。朝湯にはいつて、講釈よせの寄席へ昼寝をしにゆくのを毎日の仕事にしていたが、あんまり口やかましいので、つくだしま 佃島つくだしまの庭の梅が咲いたからお訪ねなさい、桜がよいでしょうから行つてらっしゃいと、私の父の閑居ていに体よく追払われては来た。生もくぎよていたころの木魚のおじいさんと三人、のどかな海に対して碁を打ち暮した。島には木橋あいおいぼしの相生橋あいおいぼしが懸かつていたばかり

で、橋の上を通る人は寥々りようりようとしていた。本佃ほんつくだの住吉の渡わ船たしでくるか、永代橋のきわから出て、父の閑居の門前につく渡船たしに乗るかが多かつた。

この渡船は、助さんという前の小屋にいた若い船頭さんのために、父がすこしばかり金で手伝つてやつてはじめさせた渡しだった。人通りのない父の家の門の柳が、わたし場の目じるしだった。さて、その三人の幕末の残り者が縁近くに碁盤を据えると、汐潮しおがあげてきて、鼻のさきをいせいのいい押し送りの、八丁艦ろの白帆ろが通ろうと、相生橋にお盆のような月がのぼろうと、お互が厭いやがらせをいいながら無中になっている。父は、島人から村長さんと名づけられているほどのんきで飄逸ひょういつな、長い白い髭ひげをしごい



ている。木魚の顔のおじいさんはムンツリと、そのくせゲラゲラと声をださないで崩れた顔を示す。つまみよせたような眼の、キンカン頭の藤木さんは、俳諧はいかいでもやりそうな渋仕立しぶじたての道行き姿になって、宗匠頭そうしやうづきん巾のような帽子を頭にのせている。そして懐中時計を三十分に一度はきつと出して、ただ眺める。竜頭りゆうづをいじって耳へもつてゆくしぐさを繰返す――

この碁打ちたち、かたちはさも巧者でありそうだが、だが、あの折、妹の婿の若い、海軍のヘツポコ少尉がこの三人の前で、「とても駄目です、僕は軍艦かんかんでも、ものにならない方の、その中の一番しまいです。」

「まあ、やって見な、おれが対手あいてになってやろう。」

父が少尉との最初の盤にむきあつてすぐ負けた。若い軍人は言つた。

「お父さん負けてくださつたんです、そんなはずはありません。」  
「そりやそうだろうとも、さあお出なさい、こんどは僕だ。」

藤木宗匠が向つた。父は変な顔をして黙つていた。勿論チンコツきり宗匠もすぐ負けた。

「妙だね、こりやおつだよ、以心伝心、若いものに華はなをもたせようとするのかな。湯川うじ氏はそうはいかないぜ。」

「いや、拙者はどうも。」

木魚のおじいさんは目をクシヤクシヤとしばたいて、墓ひきがえるのよ  
うにゆつたりしている。だが、結局はやつぱり負けた。若い少尉

はころがつて笑った。

「僕より拙ますいものがあるなんて——これじゃ碁まじゃない……」

「碁まじゃないって？　碁まじゃない、碁まじゃない、こちやゴジャゴジャだ。」

藤木さんも黄色い長い歯を出して笑った。

しかし、そうしたのんきな生活くらし——芸妓屋おとつさんの成功も、藤木さんみずから努力した運ではなかった。彼の生涯に恵まれた幸福は、服従心の強い、優しい妻と娘とをもった事だった。木魚の顔のおじいさんの老妻がいしくもいったことがある。

「親不孝者が、親孝行の子をもつなんて、誠に不思議さね。」

清きよもと元と踊りで売っていた姉娘お麻あさに地味じみな客がついた。丁度

年期があいたあとだったので、彼女は地味にひいてしまった。その頃の九段坂上は現今いまよりグツと野暮な山の手だった——富士見町の花柳界が盛りになったのは、回向院えこういんの大角力おおずもうが幾場所かしようしようこんしゃ招魂社しょうこんしゃの境内へかかってから、メキメキと格が上ったのだ。従つて町の雰囲気も違つて来た——お麻さんが選んだ妾宅うぢは、朝々年寄つた小役員でも出てゆきそうな家だった。母親は台所のためによばれていったので藤木さんの不服は一方ならずであつた。

お麻さんがその妾宅で、鬢まわりをひつつめた山の手風の大丸まるまげ鬘しぼにいつて、短かく着物をきていたのも暫しばらくで、また柳橋へかへつた。こんどは提灯かんぼんかりの通勤かよひだったので、おなじ芸妓屋町に住居をもつた。

地味な気性でも若い芸妓である、雛妓のうちから顔馴染の多い土地で住居をもったから、訪ねてくるものもある。見得の張りたところを裏長屋で辛棒しんぼうしているのだから、察してやらなければならぬのを、チンコツきりに厭あきはてた父親は、一緒に住まわせなければ、晩にいつてその家の棟むねで首をくくつてやるといやがらせた。事実そうもしかねないほど思い入っているので、世しよた帯いを一つにしたが——娘の心は悲しかったであつたらう。芸で売った柳橋だとはいえ、一時に負担が重すぎた。私は従姉いとこをたずねていつて、暗澹あんたんたる有様に胸をうたれて途方にくれたことがある。これが、あのはなやかに、あでやかに見える、左ひだりづま褌つまをとる女の背ひとせびらに負う影かと——

平右衛門町の露路裏だった。柳橋の裏河岸に、大代地に、大川の水にゆらぐ紅燈は、幾多の遊人の魂をゆるがすに、この露路裏の黒暗は、彼女の疲労のように重く暗くおどんでいる。一番奥の、人力車夫の長家のような、板戸の家が彼女の巢だった。更けてはいなかったが戸を叩くと、床の低い四角い家の上りがまちに藤木さんが寐ていて黒つぽくモゾモゾした。奥の壁の隅に島田鬻が小さく後向きに寐ている。にぶい燈火にも根に結んだ銀丈長が光っていた。壁にはいろいろなものがさげてあったが、芸妓の住居らしい華やかなものは一品もなかった。

「あの娘は瘡のせいかな寐出すと一日でも二日でも死んだものように眠っていて——」

母親は祝いにきてくれたのにと気の毒そうに呟いた。

心の重荷——そんなものが感じられて従姉の苦悩に私は胸をひきしめられていた。この裏家から高棲をとつて、切火をかけられて出てゆく芸妓姿はうけとれなかつたが、毎日細一二子位な木綿ものを着て、以前の抱えられた芸妓屋へゆき、着物をきかえて洗湯にも髪結いさんにもゆくのだと母親が説明した。

とはいえ、そうしたはかない裏は知らず、料亭の二階へよぶ客は、芸妓と見れば自分から陽気になつてくれる。彼女にもよい客が出来かけた。今日は何家の裏二階で、昨日はどここの離れでと招ぶ客の名が知れると、妙なことにチンコツきりおじさんが納まらなくなつた。前に囲つてくれた旦那と二人して妨害運動をしたり

したが、律気な——鉢植えの櫛けみたいな生れつきの妓ひとにも芽が出て、だんだんに繁はんじょう昌しょうして来た。一人だちになり、勝気な負ずぎらいな妹もおなじ水にはいつて、どうやら抱妓かかえもおけるようになった時、東京中の盛り場で「旦那」とよぶのはあの人だけだといわれた遊び手の、若い大商人と縁を結んだ。

小山内薫氏の書いた小説『大川端』や『落葉』に出てくる木場きばの旦那、および多おほさんがこの二人である。多さんとは藤木麻女のことである。

私はついにそこまで達した彼女の子供の時からの苦勞をあんまり知りすぎている。だまって苦惱をなになってゆく。瘦やせた、小柄な、あまりパツとしない彼女の芸妓姿を、いたわり撫なでたい気持



ちで遠くながめていた。アンポンタンは成長するにしたがい家内いえいのなかの異端者としてみられていたから、どうする事も出来ないで、抱えの時分、ながれやま流山なみりんみりん瓶入の贈物つかいものをもつてくる彼女の背中を目で撫ていたが、彼女におとずれた幸福は、彼女にはあんまりけばけばしい色彩なので、信実はやつぱり苦勞たえが絶ないであろうと痛々しかつた。なぜなら、らんまんたる桜の咲きさかる春のような、または篠しのつく豪雨のカラリと晴れた、夏のような風情ふぜいは彼女にはそぐわなかつた。もつと地味で、堅実な愛が、彼女を待たなければ真の幸福とはいえないように思えた。私が彼女にあうことはより遠々しくなつた。

放蕩ほうとうじ児が金を散じる時の所作しよさはまず大同小異である、たいこも幫ばう

間ちにきせる羽織が一枚か百枚の差である。芸妓のとりまきが一流と二流の相違は、料亭待合ちやまちあいの格式、遊ぶ土地、すべての附合の範圍と広さにおよぼしている。中村鴈治郎なかむらがんじろうが東都の人気を掴かくどく得しようとするとと歌舞伎座から「まだ旦那のお招きをうけないが——」と頼みこんでくる。摂津大掾せつづだいじようが来た、何が来たとと東京の盛り場の人たちが大阪でうけるお礼のかえしを、一手に引受けるほど遊びに顔を売った旦那を彼女は旦那にしたのだった。しかも彼女は律気真面目まじめ一方で彼をまもつた。

彼女は浜町に住んだ。藤木さん夫婦は妹娘しんを真まにして柳橋でパリパリの××家のおとっさんおつかさんになつてしまった。手てぬぐ拭いゆかたの立膝たてひざで昔話をして、小山内さんや猿之助を煙にま

いていた。浜町の家には、近くの中洲なかすの真砂座まさござにたむろしていた、  
 伊井、河合、村田、福島、木村などの新派俳優の下廻りが、どつ  
 ちが楽屋かわからないほど入込んでいた。藤井六輔ろくすけとか小堀誠  
 などは自分の家のようにまめに働いていた。芸妓、各遊芸の家元  
 たち、はなしか、幫間たいごもち、集ればワツワツいう騒ぎだった。お  
 麻さんはいつもそれらの後始末ばかりしていたが、彼女はいっちゅ中  
うぶし節の都の家元から一稻の名をもらっていたので、その名びろめ  
 を旦那が思いついた時は——彼女に対する日頃の謝意というより  
 自分の道楽の方が勝つたであろうが、二日に渡った盛大な催しを  
 柳橋の亀清楼かめせいで催した。仕着せ、まきもの、配りもの、飾りもの、  
 ありきたりな凝こりようではなかった。芦あしに都みやごどり鳥を描いた提ちようち

灯<sup>ん</sup>は、さしにも広い亀清楼の楼上楼下にかけつらねられて、その灯入りの美しさ——岸につないだ家根船<sup>やねぶね</sup>にまでおなじ飾りが水にゆれて流れた。

浜町の岡田では、この旦那のために舞台をつくって、あの広い家中を、一間一間楽屋にして素人芝居が開催される。もとより番附その他の設備、楽屋の積物、いうまでもなく人気役者の名題披露の通りにした。とうとう新富座まで借り入れてやったこともある。

お麻さんと旦那の生活はこの位にしておこう。お麻さん夫婦の浜町の家の特記してよいのは、小山内氏のために潮文閣<sup>おこ</sup>を挙<sup>あ</sup>げて第一期『新思潮』を出したことである。そのころとしては作家た

ちを花屋敷の常磐ときわという一流料亭に招待したり、一足飛びに稿料何円かを支払って一般の稿料価上げを促したものである。

姉娘と妹娘との旦那の張合いで、××家は柳橋でもパリパリの芸妓家となった。妹娘の旦那、銀行の頭取りは、事ごとに木場の旦那とは違ったゆきかたで、自分の女ものにした妹娘の家作かざくに手入れをする、動産、不動産、いずれも消てしまわないものを注ぎ込んだ。その時分の藤木さんの家こそ不思議だ。敷居一つまたぐと次の間は妹の家作で、入口の方の家が姉娘の家作、どっちの道、角家の磨きあげた二階家つづきで、お麻さんの芸妓名うりなをついだ妹が主で、大勢の抱妓かかえがいた。妹は築地のサンマー夫人のところへ会話を習いにいったりして、二階の間には床の間に花あり、衣桁いこう

あり、飾り棚があり、塗机があり、書道の手本と硯すずりが並べてあるという豪奢ごうしゃな貴婦人好みであつた。

産むなら女の子をうんでおけと——むべなるかなで、チンコツきりおじさんはその家のお父さんとして死んだので、実に大層もない葬式の列が編あみ上げられて、死に果報なこととなつたが、同時にこそばゆい華やかさでもあつた。

最もその時分、角力すもうの親方だとか顔役だとか、人気役者とかい  
えば、そうした突拍子もないお祭りさわぎの葬式もあつたが、チ  
ンコツきりおじさんを知っているものには不思議な微笑をもつて  
送られた。小禽ことりが何百羽はいつていようかと思われるほどの大鳥  
籠かご、万燈まんどんのような飾りもの、金、銀、紅、白の蓮はすの造花、生花

はあらゆる種々な格好になつてくる。竜燈、旗、天蓋てんがい、笙しょう、篳ひちりき、女たちは白無垢しろむく、男は編笠をかぶつて——清楚せいそな寝棺は一  
 代の麗人か聖人の遺骸いがいをおさめたように、みずみずしい白絹にお  
 おわれ、白蓮の花が四方の角を飾つて、青い簾すだれが白房で半ば捲上まきあ  
 げられ、それを幾町が間か肩にかつぎあげずに静々と柳橋から蔵  
 前通りへと練り歩かれた。

それをまた迎える本堂は花を降らし、衆僧は棺をめぐつて和讃わさん  
 の合唱と香の煙りとで人を窒息させた。しかもまた堂にみつる会  
 衆は、片時もだまつていられないたちの種類なので、後側の方は、  
 おとむらいなのかお浚さらいなのか、ともかく寄合には相違ないが忍  
 び笑いまでする——

私は死んでも、決して自分ひとり所有の、立派なお墓なんていうものを建てるものではないと、その時思った。前にもいったが、藤木家一族の墓石は幾十基かならんでいるが、その中に、特によい位置をしめて、四角四面、見上げるほど高く、紋をつけた家根まで一ツ石でとつてある、石の質も他のとは違うゆいしよありげな一基は、ずっと前の徳川將軍に昵懇じっこんしていた女性の墓だということだった。それがまあ、なんと光榮なお見出しに預かつたところか、肝心な墓の主に断わりもなく——尤も断わろうにも百万億土にゆかなければならないが——墓主が代つたことである。これがいい、これがいい、そんな風にかんたんにとりかわってしまった



た。そして、かつてはどんな美女で、將軍の意志、即ち時の天下の意志を動かしたかも知れない女の墓名は、チンコツきりおじさんの名に代つてしまった。尤も、何々院殿という偉そうな名にはなつたが――

しかし、もとの墓主だつて、私は美女ときめているが、どんな人だつたのか、それはわかりはしない。墓石が立派だから、下の人まで立派だといわれぬ。むしろ藤木さんなどは愛すべき俗人だ。彼は言つてゐるだろう。

「なんというべらぼうなこつたか、干からびた鼠ねずみのような俺おれが――  
—ここにはいるんだつて？ わしや、はずかしいわいなあ。」



# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# お墓のすげかえ

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>